

厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）  
「歯科衛生士及び歯科技工士の就業状況等に基づく安定供給方策に関する研究」  
(H29-医療-一般-003)  
平成 29 年度～30 年度 総合研究報告書

## 歯科衛生士の就業状況に基づく人材育成のあり方に関する分析

研究分担者 三浦 宏子 国立保健医療科学院・部長（国際協力研究部）

### 研究要旨

【目的】歯科衛生士による歯科保健サービスの提供体制の強化を図るためには、その就業状況を把握する必要がある。本研究では、歯科衛生士養成校の同窓会員を対象とした調査を行い、歯科衛生士の就労状況とその関連要因を明らかにした。

【対象と方法】3校の歯科衛生士養成校（九州、都内、北海道から各1校）の同窓会員を対象に、自記式質問紙調査を行い、537名の有効回答を得た（有効回答率：37.2%）。就業率など就業状況に関する記述統計量を求めるとともに、就業に対する関連要因について二変量解析ならびに多重ロジスティック回帰分析を行った。

【結果】就業率は全体で68.3%であり、年代間で有意差が認められた（ $p < 0.01$ ）。一方、転職経験者率は70.2%に達していた。特に、20歳代で40.7%の者が転職を経験しており、早期離職が顕在化していた。転職経験者を有する者のうち、歯科衛生士として復職した者は83.6%であった。また、常勤希望者は49.9%にとどまっていた。研修会の参加率（過去1年間）は41.6%であり、年代間で有意差が認められた（ $p < 0.01$ ）。多重ロジスティック回帰分析の結果、就業率に有意に関連したのは「研修会の参加状況」と「希望する勤務形態（常勤・非常勤）」の2項目であった。

【考察】2011年度の先行調査との比較において、就業率は依然7割程度であり、復職支援の継続的な実施の必要性が示された。また、早期離職対策の導入は喫緊の課題であるため、就労状況に関連する要因のひとつである「研修会」等の自己研鑽の機会の拡充を図り、年代ごとの就労ニーズを踏まえたキャリア教育の提供体制の構築について早急に検討する必要があると考えられた。

【結論】歯科衛生士の就労について、引き続き30-40歳代を中心とした復職支援対策を強化する必要がある。また、早期離職の抑制を図るうえで、研修会などの提供や、キャリア教育の拡充が必須の要件であることが示唆された。

## A. 研究目的

超高齢社会における歯科医療・口腔保健の推進等において、歯科衛生士による口腔衛生管理業務に対するニーズは更に増大する傾向にあり、歯科衛生士の活躍の場は広がりつつある。平成 28 年の衛生行政報告例では、わが国の全国の就業歯科衛生士数は 123,831 人で前回の調査時（平成 26 年末）に比べ、7,532 人（6.5%）増加している。しかし、増え続けるニーズに対して十分な人材供給はなされておらず、歯科衛生士に関する各種需給分析においても人員不足状態といわれている。各ライフステージの特徴を捉え、生涯を通じた歯科保健医療サービス提供を提供するためには、歯科衛生士の人材確保は大きな課題であり、歯科衛生士の就労実態に基づく供給体制のあり方を検討することが急務である。

歯科衛生士は、女性がほとんどを占める職業であるため、女性のライフステージにおけるイベントや変化のたびに転職や退職をするものが多く、年代ごとの就業率についても 30 歳代で低下する M 字カーブを示すと言われていた。しかし、平成 28 年の衛生行政報告例での全国データでは、「25～29 歳」から「45～49 歳」にかけて概ね均等に分布しており、典型的な M 字カーブとは異なる分布を示している。過去約 10 年間の推移では、特に 35 歳以上の各階級における割合が増え続けるなど、生涯にわたって就業する歯科衛生士の総数は上昇するなど、新たな傾向も示している。

我々は平成 23 年の厚生労働科学研究等において歯科衛生士の復職支援や就労支援に関連する調査研究を行ってきた。しかし、この 7 年間の歯科保健医療を取り巻く環境は、上述するように大きな変容を遂げ、現在の歯科衛生士の就労に影響を与える要因分析等についても再度の調査分析を行う必要がある。そこで、本研究事業では、開設してから 40 年以上の歴史を有する歯科衛生士専門学校の同窓会員を対象として、就業状況に関する調査を行った。

## B. 対象および方法

### （1）対象者の選定と研究デザイン

本研究では、異なる地域にある歯科衛生士養成の 3 伝統校の同窓会と連携を図り、調査協力を得た。九州、都内、北海道から各々 1 校ずつ歯科衛生士専門学校を選び、学校長と同窓会の調査許諾を得て、調査を実施した。調査方法は、自記式質問紙を用いた留め置き調査であり、郵送にて質問紙の送付と回収を行った。調査にあたっては、同窓会が送付先住所を保有していた 1,444 名（北海道地域 506 名、都内 596 名、九州地域 342 名）の同窓生について、卒業年次ごとに均等に対象者を無作為に抽出し、調査対象者とした。調査票の記入に際しては無記名とした。回収された調査票のうち、回答者の年齢が 60 歳以上の者については、本調査の主旨を鑑み除外し、537 件の有効回答を得た（有効回収率：37.2%）。

### （2）調査項目

主たる質問項目は、これまでの調査研究をもとに、対象者の属性（年齢、婚姻状況、世帯員数、子供の数、歯科衛生士免許取得年数、歯科衛生士としての勤務年数）、歯科衛生士会

入会の有無、最近1年間での研修会の参加の有無、転職経験の有無とその回数、ならびに転職活動の際に活用した情報先等を調べるとともに、希望する勤務条件（常勤・非常勤、希望賃金、希望業務内容）とした。未就労者に対しては、歯科衛生士として復職希望の有無についても回答を求めた。また、就労において重視する事項や、就労時の障害の有無とその種類についても併せて調べた。

### （3）分析方法

得られたデータから回答者の全体の記述統計量を求めるとともに、各調査項目について年代ごとに $\chi^2$ 検定もしくは unpaired t 検定を行い、年代間で回答状況に差があるか調べた。また、現在の就労状況への影響要因を調べるために、多重ロジスティック回帰分析を行った。

### （4）倫理面への配慮

本研究は、無記名調査票を用い、氏名等の個人情報を含まないデータによる分析を行うものである。なお、本研究は、事前に日本歯科大学東京短期大学の倫理審査を受け、承認されたうえで実施している（承認番号：東短倫-218）。

## C. 研究結果

### （1）主要属性の基本統計量

表1に主要な属性をまとめた。回答者の平均年齢は39.1±8.9歳であり、歯科衛生士としての就業率は68.3%であった。転職経験を有する者は70.2%に達していた。また、就労へのモチベーションを示す指標のひとつである研修への参加状況は41.6%であった。

図1には、主要属性についての年代ごとの状況を示した。歯科衛生士としての就業率、転職経験率、研修会参加率については年代間で有意差が認められた( $p<0.01$ )。就業率については、20歳代と30歳代の間で明確な差異が認められた。20歳代において、既に約4割の者が転職を経験する等、早期離職の傾向が顕在化していた。

表1. 対象者の基本属性 (N=537)

平均年齢（年）	39.1±8.9
平均免許取得期間（年）	17.3±9.7
平均就業期間（年）	11.4±7.7
婚姻率	66.4%
子ども保有者率	61.0%
就業率	68.3%
転職経験者率	70.2%
過去1年間での研修会参加率	41.6%

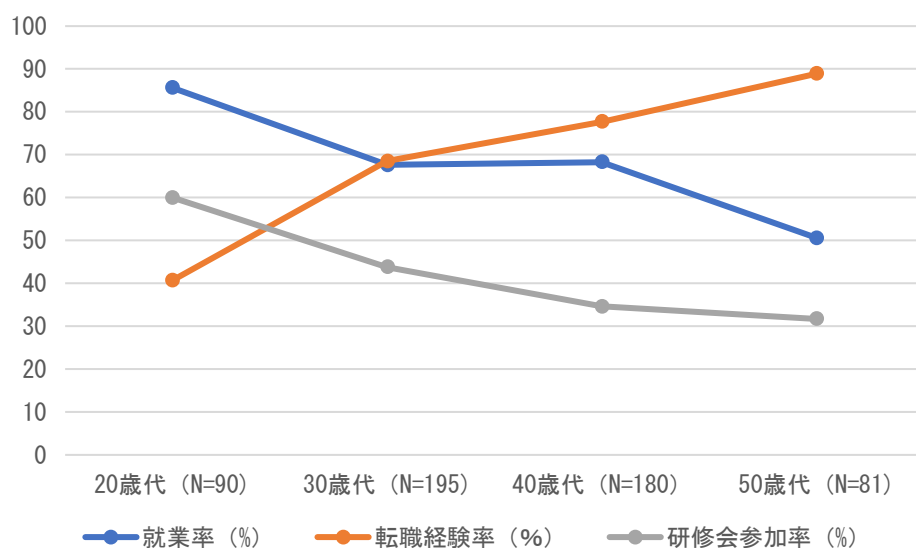


図1. 就業率，転職経験率ならびに研修会参加率に関する年代別推移

## (2) 復職時に用いた情報源

転職経験を有する373名のうち、歯科衛生士として復職した者は83.6%であった。また、復職時に使用していた情報源としては、ハローワークを活用していた者が最も多く、全体で63.4%に達していた。次いでインターネット利用と知人の紹介が高率であり、ともに3割を超していた(図2)。同窓会や歯科衛生士会を活用した者は低率であった。

特に、活用率が高かったハローワーク利用状況とインターネット利用状況について年代別に調べたところ、ハローワーク利用については年代間での有意差は認められず、いずれの年代でも高い利用率を示した。一方、インターネット利用状況は、年代間で有意差が認められ( $P<0.01$ )年代を追うごとに低下した。20歳代でのインターネット利用率は、ハローワークと同程度の利用状況を示した。

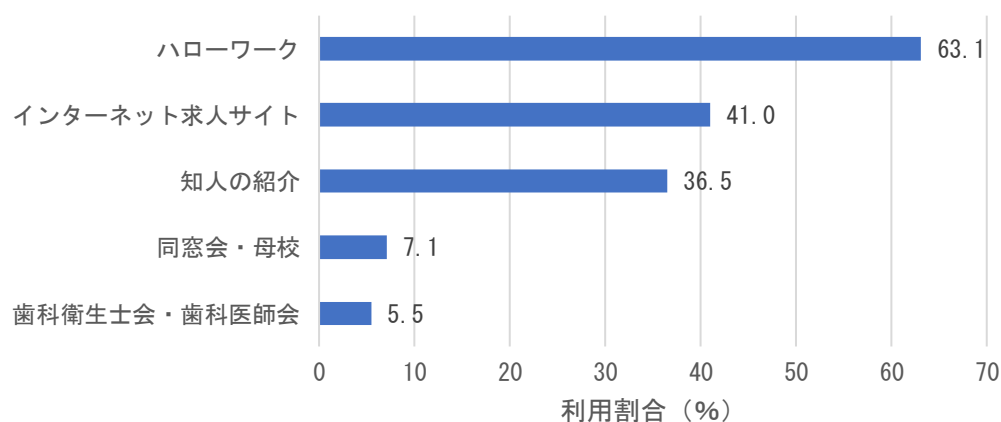


図2. 復職の際に活用した情報源 (N=312)

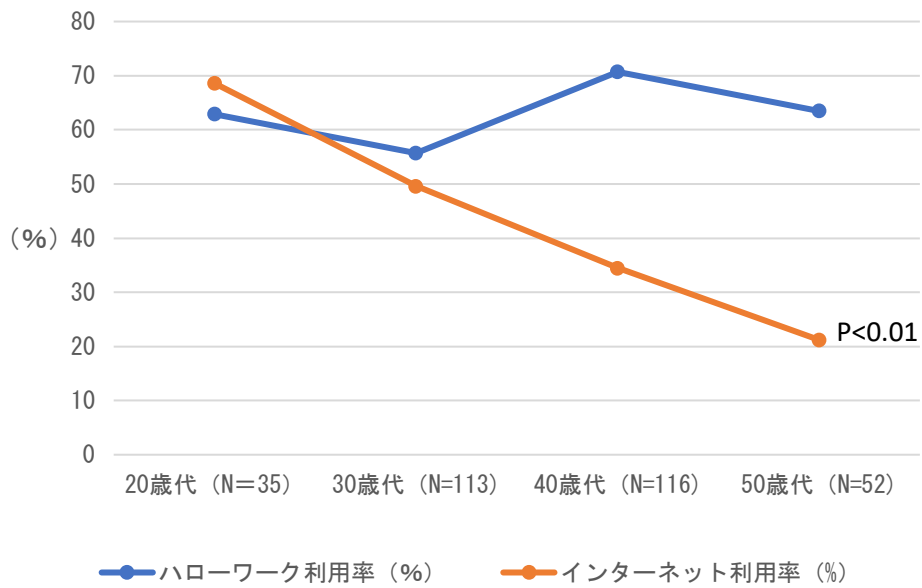


図 3. ハローワーク利用率とインターネット利用率の年代ごとの推移

### (3) 希望勤務条件

週 40 時間以上の常勤勤務を希望する者は 49.5%、非常勤を希望する者は 41.9%であった (図 4)。また、非常勤を希望した者において、午前勤務を希望した者が 88.6%に達していた。一方、希望賃金については、地域格差が顕著に表れたため、地域別にその状況を示した (図 5)。九州地域同窓会員での希望賃金分布のピークは「時給 1,000 円～1,200 円未満」にあり、北海道地域同窓会員では「時給 1,200～1,400 円未満」であった。一方、都内同窓会員では「時給 1,600 円以上」が最も頻度が高かった。

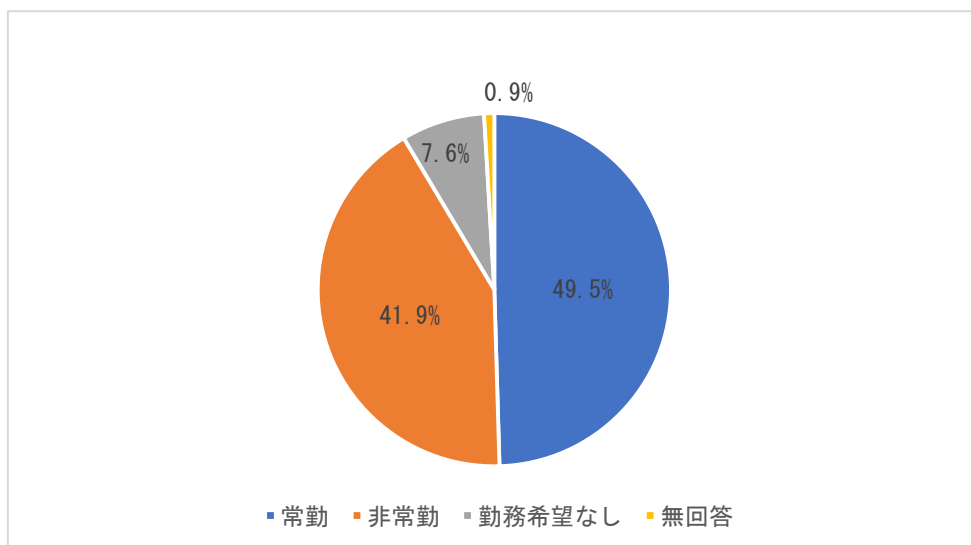


図 4. 希望勤務形態 (N=537)

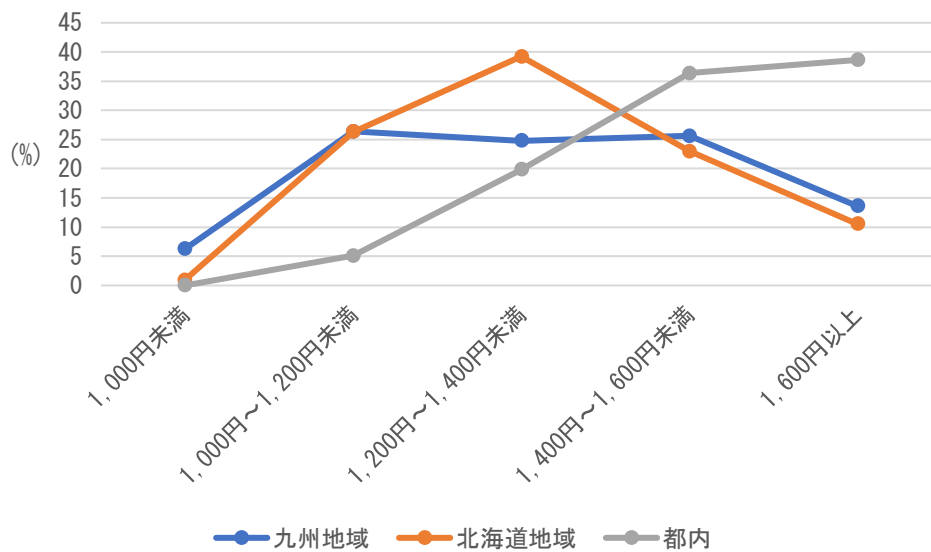


図 5. 地域別・希望賃金レベル (N=537)

一方、希望業務内容については、地域差は認められなかったことより、全体データの分析結果を示した (図 6)。予防、歯周ケアを挙げた者が相対的に多く、それぞれ 7 割弱程度であった。その一方、口腔ケアを希望業務として挙げた者は、39.3%と相対的に少なかった。一方、これらの希望業務について年代間での違いを調べたところ、歯周ケアと口腔ケアでは年代間で有意差が認められたが、それ以外の業務について有意差が認められなかった (図 7)。歯周ケア希望は年代を経るごとに有意に低下する一方 ( $p < 0.01$ )、口腔ケア希望は年代を経るごとに有意に増加した ( $p < 0.01$ )。

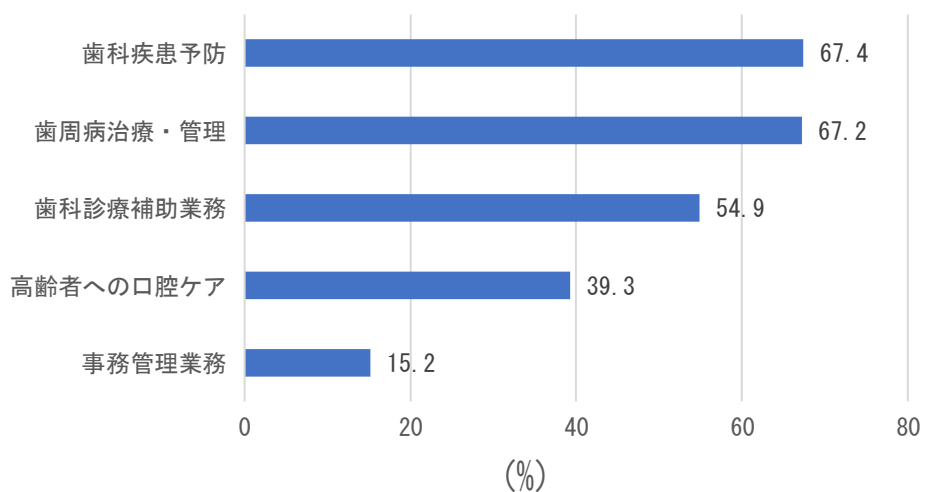


図 6. 希望業務の状況 (N=537)

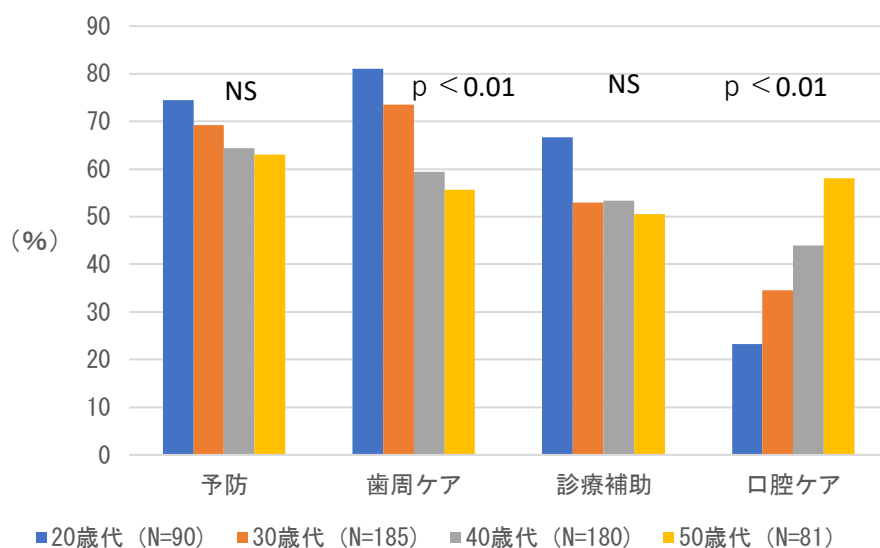


図 7. 年代別の希望業務の状況 (N=295)

#### (4) 未就業者における再就労への意欲

未就業者 166 名における再就労意欲について図 8 に示す。「大変ある」、「少しある」の両方を併せて、64.5%の者が再就労への意欲を示した。図 9 には、年代ごとの再就労希望率を示す。相対的に 20 歳代での再就労希望率が高かったが、特色として 40 歳代での再就労意欲が非常に低く、年代間の差異が顕著に認められた。

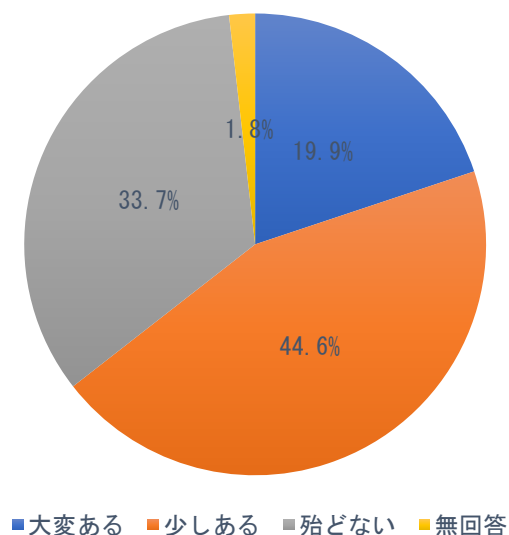


図 8. 未就業者における再就労への意欲 (N=166)

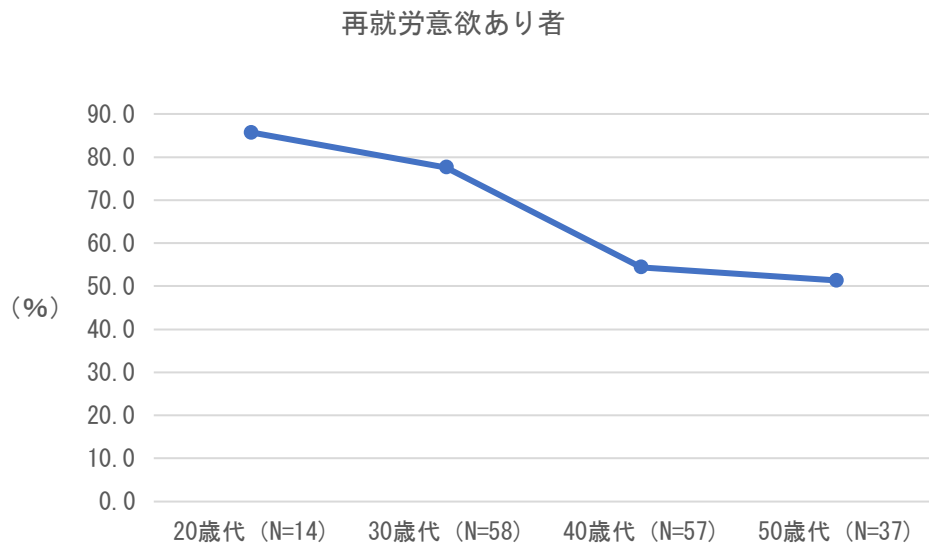


図 9. 年代ごとの再就労希望者の状況 (N=42)

#### (5) 就労に際しての重視事項と就労における障壁の有無

図 10 に就労に際して重視する事項について示す。最も高率であったのは「勤務時間」であり、80.8%であった。次いで、「人間関係」と「賃金」、「勤務場所」、「業務内容」の順であった。

障壁が「ある」と回答した者が 260 名であり、48.7%を占めた。その内容を調べたところ、「家庭」を挙げた者が最も多く、次いで、「技術不足」、「人間関係」、「雇用条件」、「健康面への不安」の順であった (図 9)。

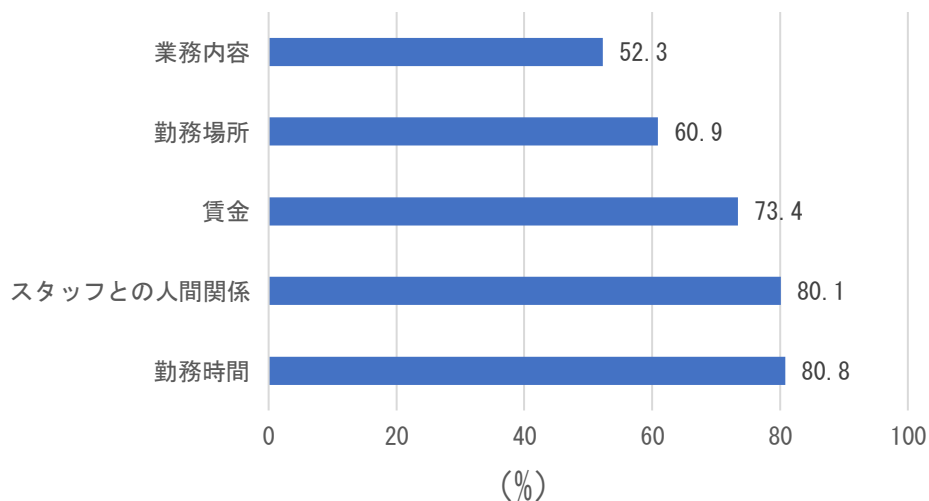


図 10. 就労において重視する事項 (N=125)



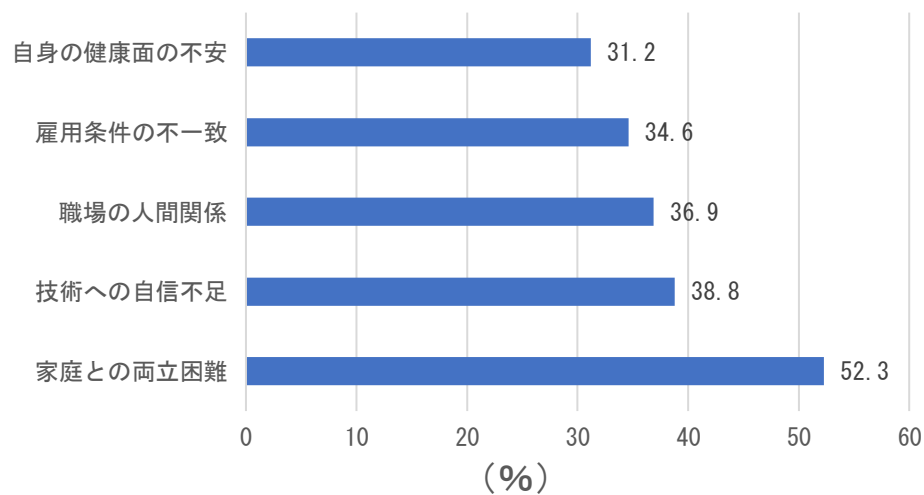


図 11. 障壁を感じる者における障害の種類 (N=260)

#### (6) 就労状況に影響を及ぼす要因についての多変量解析

現在の就労状況に影響を与える要因分析のために、多重ロジスティック回帰分析を行った結果を表 2 に示す。従属変数を「歯科衛生士での就労の有無」、独立変数を「年齢」、「免許取得年数」、「婚姻状況」、「子どもの数」、「研修会への参加」、「希望勤務形態」、「希望賃金レベル」、「重視項目（賃金）」、「重視項目（勤務時間）」、「重視項目（勤務場所）」、「重視項目（業務内容）」、「重視項目（人間関係）」とした。その結果、現在の就労の有無に関連していた要因は、「研修会参加状況」、「希望勤務形態」であった。

表 2. 就労状況に関連する影響要因：多重ロジスティック回帰分析

独立変数	$\beta$	SE	Wald	p 値	オッズ比	95%信頼区間
研修会参加状況	2.283	0.431	28.034	0.000	9.91	4.213-22.844
希望勤務形態	-0.867	0.277	9.813	0.002	0.42	0.244-0.723
定数	0.472	0.681	0.48	0.488	1.603	

#### D. 考察

本研究の結果より、現在の歯科衛生士の就労状況に関する要因分析を行うことができた。希望賃金レベルなどは地域間格差が顕著であったが、就労に関連する要件は近似した状況にあったため、今回、協力が得られた 3 校の歯科衛生士養成校同窓会員 537 名分を併せて分析を行った。

就業率については、顕著な M 字カーブではなく、緩やかに年代とともに低減していく傾向を示した。また、20 歳代の転職経験率が 4 割に達するなど、早期離職傾向が顕在化してい

た。また、就業率と研修受講経験者率の分布パターンは近似していた。離職者の多くは、歯科衛生士としての再就労を希望したが、その希望者率は、年代を経るごとに急速に低下し、特に 30 歳代から 40 歳代にかけて大きく低下することが示された。就労について、重視する内容は、賃金より勤務時間と人間関係を挙げる者が高率であった。これらの傾向は、過去の関連する調査研究でも示されているものであり、特に「午前みの非常勤」勤務者の就労ニーズへの対応が必要と考えられる。歯科診療所勤務の場合、職場に保育施設の設置等が極めて少ないことを踏まえ、歯科衛生士でないとできない業務と他のスタッフがタスクシフトできる業務を区分し、職種間で勤務時間帯の調整を行うなどの新しい対応が強く求められる。

再就労の際の情報源としては、ハローワーク利用がいずれの年代でも高率であったが、20 歳～30 歳代にかけての若手年代ではインターネットの求人サイトの利用率も高く、今後、早期離職を防ぐためにもサイトに掲載する求人情報の質の向上を図る必要があると考えられる。早期離職の原因については、本調査の結果だけでは詳細を把握できないが、サイト掲載の場合、求人情報の精査が難しく、そのために勤務してから自身の希望と異なる就労状況であることに気づき、早期退職につながる事例も相当数あるものと推察される。早期離職を予防するためには、歯科衛生士養成校でのキャリア教育を推進するとともに、求人情報提供側での工夫も求められる。

多重ロジスティック回帰分析の結果、就労状況に有意に関連していた項目として、労働条件ではない「研修会の受講経験」が挙げられていたことは極めて興味深い。進歩する歯科保健医療の情報を継続的に入手し、自己研鑽に努めるのは歯科医療専門職として必須の要件である。希望業務のうち「歯周ケア」は年代が上がるとともに、希望者が有意に低減し、「口腔ケア」については、年代が上がるとともに、希望者が有意に増加する等、年代等によって求める研修内容も異なることも踏まえ、質の高い研修プログラムを継続的に提供していく必要がある。障壁を感じる具体的な項目として「技術不足」を挙げた者が高率に認められたことを踏まえ、研修プログラムの提供状況やその効果について、さらに研究を進め、より有効な取り組みを見出す必要がある。

本研究の限界点としては、今回対象とした歯科衛生士養成校同窓会は 3 か所にとどまっております。関西地域や中部地域の養成校同窓会が包含されていない点である。個人情報の管理の在り方の時代的变化を受けて、同窓会員名簿が整備されている同窓会も減少しつつあり、この種の調査の実施においては困難を要する点もあった。しかし、本調査は、そのような制約にもかかわらず、今後の歯科衛生士の就労環境の改善等に資する有用な知見を得ることができたと考えられる。

## E. 結論

歯科衛生士の就労について、引き続き 30-40 歳代を中心とした復職支援対策を強化する必要がある。また、早期離職の抑制を図るうえで、研修会などの提供や、キャリア教育

の拡充が必須の要件であることが示唆された。

#### F. 参考文献

- 1) Usui Y, Miura H. Workforce re-entry for Japanese unemployed dental hygienists. International Journal of Dental Hygiene. 2015; 13:74-78.
- 2) 厚生労働省. 平成 28 年衛生行政報告例 (就業医療関係者) の概況. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/16/dl/gaikyo.pdf>
- 3) 厚生労働省. 平成 29 年版働く女性の実情. <https://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/17.html>
- 4) 厚生労働省 看護職員就業状況など実態調査結果. 資料 2.
- 5) 日本歯科衛生士会. 歯科衛生士の勤務実態調査報告書. 2015 年 3 月.
- 6) 日本歯科衛生士会. 歯科衛生士の人材確保・復職支援等に関する検討会報告書. 2017 年 6 月.
- 7) 林恵子. 歯科医師と歯科衛生士の連携・協働の実際. 日補綴会 2014 ; 6 : 273-278.
- 8) 三浦宏子、薄井由枝. 歯科衛生士養成校同窓会員の就業状況に関する要因分析. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金「歯科医療関係職種と歯科医療機関の業務のあり方及び需給予測に関する研究」(H23-医療-指定-013) 報告書. p. 45-63.
- 9) 三浦宏子、薄井由枝、利根川幸子. 歯科衛生士の就業状況に基づく人材育成の在り方に関する分析. 平成 29 年度厚生労働科学研究費補助金「歯科医療関係職種と歯科医療機関の業務のあり方及び需給予測に関する研究」報告書. p. 7-21.
- 10) 三浦佳子. 知りたい! 歯科衛生士の復職事情. デンタルハイジーン. 2016 : 36 : 886-889.

#### G. 研究発表：学会発表

- ・三浦宏子、薄井由枝、利根川幸子：歯科衛生士の就業状況に基づく人材育成のあり方に関する分析. 第 77 回日本公衆衛生学会；福島：2018 年 10 月.

#### H. 知的財産権の出願・登録状況 該当なし

